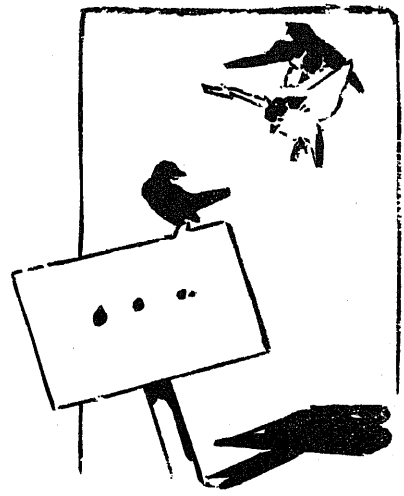

フレーベル會俳句端書集

一、課題　當季雜吟一人十句以下
一、締切　六月二十五日限り
一、披露　明治三十八年八月發行本誌文苑欄
一、賞品　天地人三座には美景を呈す
一、撰者　當分本會の撰とす
一、投稿　本誌購讀者は何人にても投吟する事を得用紙は繪葉書に限り（眞筆刷物隨意）住所氏名雅號を明記し必らず左の名宛にて送らるべし、

埼玉縣入間郡芳野村
フレーベル會俳句掛
鹽野寄零宛

第十一回俳句端書集

大名もしのび姿や初ざくら　東京　藤並ゆかり
爪音は誰がつれ〳〵や花の雨　同
山燒て麓にせまる暮雲かな　同
梨花白し葛飾の里黃昏るゝ　同
葉櫻や誰が折敷し釣の跡　仙臺　立花一瓢
葉櫻や寂たる寺の寄進札　同
銅像の眉に積りぬ花吹雪　同

麗やはるかに拜す畝傍山　大分町　吉田　春月

俳を說く孤燈の下や啼く蛙　同

城跡や古木の櫻尙ほ朽ちず　同

夜櫻や高き廊下にさゞめごと　長野市　飯塚　曉霞

舟唄の遠く聞えて夕かすみ　同

春の川椿流れて暮れにけり　陸奥　須藤美佐子

摘草や英吉利の子も交りたる　同

朝風の庭一面や落椿　同

戀草の捨てゝもあるや惜む春　同

人去りて一人語りぬ散るさくら　埼玉　帶津　帶水

櫻がり祝捷會の池の端　同

蓮華花葉も咲けり方十歩　武藏　大野白醉樓

霞漠々末は櫻に連らなりぬ　同

窓外に春の散り行く花一株　同

山笑ひ人も笑ひて鳥の啼く　同

朝風に心浮立つ櫻かな　東京　吉村　白鷹

花の下醉ふて瓢を枕かな　同

雉子啼くや裾から晴るゝ山の雨　武田　清窓

忠魂の眠れる塚や散る櫻　同

山鳩の雲を呼び出す若葉かな　豐前　金子　琴月

葉櫻や昔思へは耻かしき　同

濡色に山の明け行く四月かな　上總　高橋　波月

蛇穴を出たり草家の曲り道　同

鳥の巢の古さを見るや木の芽摘　同

小式部の返歌ありけり春の宵　栃木　櫻川　閑山

雨の蛙律師が宿の連歌かな　上野　加藤よし子

垣破れて山吹の伏す小溝かな　同

有明のうす紫や杜若　同

葉櫻や金網かけし常夜燈　常陸　落花庵

鶯の老て久しき五月かな　月田　一市

葉櫻に鳥居かくるゝ社かな　同

椽先や鶯老て人眠る　同

天位にはまだ及びがたきを嘆きて、
天迄はまだ遙かなり啼く雲雀　川越　山田だるま

人位の入賞をうけて、
人並に我もあとから花見かな　同

三　光

天　花に月間もなく雨のぽつり〳〵　吉村　白鷹

評曰、社會の事々物々凡べてのこの十七文字中にあり、
地　ピヤノ聞く上野の奥や若葉蔭　須藤美佐子

人　武德殿に弓の稽古や朝ざくら　吉田　春月

一　日　一　詠　無一庵奇零

五月一日、軍國の苗代

瘦馬に小さき男や苗代田

五月二日　睦ましく子女の群遊ふを見て

まゝ事の莚ひきけり若葉かげ

五月三日、戰地より友の便りありすぐ返事を認む

待つ君を思へば親し惜む春

五月四日、靖國神社臨時大祭

拜殿の櫻若葉や血の涙

五月五日、花屋の老爺より杜若を買ふ

山吹は早や末にして杜若

五月六日、又も南風はげし

行春や日毎うるさき風の向き

五月七日、川越大宮間の電鐵工事始まる

レールひく鐵道隊や日の永き

五月八日　教授界第三週年の祝吟をおくる

今開く牡丹美くし花三つ

五月九日、あはて、辨當をさげ出す

宵に聞く蛙に朝寐〳〵かな